渡り鳥

太宰治

おもてには快楽（けらく）をよそい、心には悩み
わずらう。

――ダンテ・アリギエリ

晩秋の夜、音楽会もすみ、日比谷公会堂から、おびただしい数の烏（からす）が、さまざまの形をして、押し合い、もみ合いしながらぞろぞろ出て来て、やがておのおのの家路に向って、むらむらぱっと飛び立つ。

「山名先生じゃ、ありませんか？」
呼びかけた一羽の烏は、無帽蓬髪（ほうはつ）の、ジャンパー姿で、痩（や）せて背の高い青年である。
「そうですが、……」
呼びかけられた烏は中年の、太った紳士である。青年にかかわまず、有楽町のほうに向ってどんどん歩きながら、
「あなたは？」
「僕ですか？」
青年は蓬髪を掻（か）き上げて笑い、
「まあ、一介（いっかい）のデリッタンティとでも、……」

「何かご用ですか？」

「ファンなんです。先生の音楽評論のファンなんです。このごろ、あまりお書きにならぬようですね。」

「書いていますよ。」

しまった！　と青年は、暗闇の中で口をゆがめる。

この青年は、東京の或る大学に籍を有しているのだが、制帽も制服も持っていない。そうして、ジャンパーと、それから間着（あいぎ）の背広服を一揃い持っている。肉親からの仕送りがまるで無い様子で、或（あ）る時は靴磨（くつみが）きをした事もあり、また或る時は宝くじ売りをした事もあって、この頃は、表看板は或る出版社の編輯（へんしゅう）の手伝いとい

う事にして、またそれも全くの出鱈目(でたらめ)では無いが、裏でちょいちょい闇商売などに参画しているらしいので、ふところは、割にあたたかの模様である。

「音楽は、モオツアルトだけですね。」

お世辞の失敗を取りかえそうとして、山名先生のモオツアルト礼讃(らいさん)の或る小論文を思い出し、おそるおそるひとりごとみたいに呟(つぶや)いて先生におもねる。

「そうとばかりも言えないが、……」

しめた！　少しご機嫌(きげん)が直って来たようだ。賭(か)けてもいい、この先生の、外套(がいとう)の襟(えり)の蔭の頰が、ゆるんだに違いない。

青年は図に乗り、

「近代音楽の堕落は、僕は、ベートーヴェンあたりからはじまっていると思うのです。音楽が人間の生活に向き合って対決を迫るとは、邪道だと思うんです。音楽の本質は、あくまでも生活の伴奏であるべきだと思うんです。僕は今夜、久し振りにモオツアルトを聞き、音楽とは、こんなものだとつくづく、……」

「僕は、ここから乗るがね。」

有楽町駅である。

「ああ、そうですか、失礼しました。今夜は、先生とお話が出来て、うれしかったです。」

ズボンのポケットに両手を突っ込んだまま、青年は、軽くお辞儀をして、先生と別れ、くるりと廻れ右をして銀座のほうに向う。

ベートーヴェンを聞けば、ベートーヴェンさ。モオツアルトを聞けば、モオツアルトさ。どっちだっていいじゃないか。あの先生、口髭（くちひげ）をはやしていやがるけど、あの口髭の趣味は難解だ。うん、どだいあの野郎には、趣味が無いのかも知れん。うん、そうだ、評論家というものには、趣味が無い、したがって嫌悪（けんお）も無い。僕も、そうかも知れん。なさけなし。しかし、口髭……。口髭を生（は）やすと歯が丈夫になるそうだが、誰

かに食らいつくため、まさか。宮さまがあったな。洋服に下駄(げた)ばきで、そうしてお髭が見事だった。お可哀そうに。実に、おん心理を解するに苦しんだな。髭がその人の生活に対決を迫っている感じ、とでも言おうか。寝顔が、すごいだろう。僕も、生やして見ようかしら。すると何かまた、わかる事があるかも知れない。マルクスの口髭は、ありゃ何だ。いったいあれは、どういう構造になっているのかな。トウモロコシを鼻の下にさしはさんでいる感じだ。不可解。デカルトの口髭は、牛のよだれのようで、あれがすなわち懐疑思想……。おや？　あれは、誰だったかな？　田辺さんだ、

間違い無し。四十歳、女もしかし、四十になると、……いつもお小遣い銭を持っているから、たのもしい。

どだい彼女は、小造りで若く見えるから、たすかる。

「田辺さん。」

うしろから肩を叩く。げえっ！　緑のベレ帽。似合わない。よせばいいのに。イデオロギストは、趣味を峻拒すか。でも、としを考えなさい、としを。

「どなたでしたかしら？」

近眼かい？　溜息が出るよ。

「クレヨン社の、……」

名前まで言わせる気かい。蓄膿症じゃないかな？

「あ、失礼。柳川さん。」

それは仮名(かめい)で、本名は別にあるんだけれど、教えてやらないよ。

「そうです。こないだは、ありがとう。」

「いいえ、こちらこそ。」

「どちらへ？」

「あなたは？」

用心していやがる。

「音楽会。」

「ああ、そう。」

安心したらしい。これだから、時々、音楽会なるも

のに行く必要があるんだ。

「わたくし、うちへ帰りますの、地下鉄で。新聞社にちょっと用事があったもので、……」

何の用事だろう。嘘（うそ）だ。男と逢って来たんじゃないか？　新聞社に用事とは、大きく出たね。どうも女の社会主義者は、虚栄心が強くて困る。

「講演ですか？」

見ろ、顔もあからめない。

「いいえ、組合の、……」

組合？　紋切型（もんきりがた）辞典に曰（いわ）く、それは右往左往して疲れて、泣く事である。多忙のシノニム。

僕も、ちょっぴり泣いた事がある。

「毎日、たいへんですね。」

「ええ、疲れますわ。」

こう来なくちゃ嘘だ。

「でも、いまは民主革命の絶好のチャンスですからね。」

「ええ、そう。チャンスです。」

「いまをはずしたら、もう、永遠に、……」

「いいえ、でも、わたくしたちは絶望しませんわ。」

またもお世辞の失敗か。むずかしいものだ。

「お茶でも飲みましょう。」

たかってやれ。

「ええ、でも、わたくし、今夜は失礼しますわ。」

ちゃっかりしていやがる。でも、こんな女房を持ったら、亭主は楽だろう。やりくりが上手（じょうず）にちがい無い。まだ、みずみずしさも、残っている。

四十女を見れば、四十女。三十女を見れば、三十女。十六七を見れば、十六七。ベートーヴェン。モオツアルト。山名先生。マルクス。デカルト。宮さま。田辺女史。しかし、もう、僕の周囲には誰もいない。風だけ。

何か食おうかなあ。胃の具合いが、どうも、……音

楽会は胃に悪いものかも知れない。げっぷを怺(こら)えたのが、いけなかった。

「おい、柳川君！」

ああ、いい名じゃない。川柳のさかさまだ。柳川鍋(やながわなべ)。いけない、あすからペンネームを変えよう。ところで、こいつは誰だったっけ。物凄(ものすご)いぶおとこだなあ。思い出した。うちの社へ、原稿を持ち込んで来た文学青年だ。つまらん奴と逢ったなあ。酔っていやがる。僕にたかる気かも知れない。よそよそしくしてやろう。

「ええっと、どなたでしたっけ。失礼ですが。」

ことに依(よ)ると、たかられるかも知れない。

「いつか、クレヨン社に原稿を持ち込んで、あなたに荷風（かふう）の猿真似（さるまね）だと言われて引下った男ですよ。お忘れですか？」

脅迫するんじゃねえだろうな。僕は、猿真似とは言わなかった筈（はず）だが。エピゴーネン、いや、イミテーションと言ったかしら。とにかく僕は、あの原稿は一枚も読んでいなかった。題が、いけなかったんだよ、ええっと、何だったっけな、「或（あ）る踊子の問わず語り」こっちが狼狽（ろうばい）して赤面したね。馬鹿な奴もあったものだ。

「思い出しました。」

いんぎん鄭重（ていちょう）に取り扱うに限る。何せ、相手は馬

鹿なんだからな。殴(なぐ)られちゃ、つまらない。でも、弱そうだ。こいつには、勝てると思うが、しかし、人は見かけに依らぬ事もあるから、用心に如(し)くはない。

「題をかえましたよ。」

ぎょっとするわい。よくそこに気が附いたね。まんざら馬鹿でもないらしい。

「そうですか。そのほうが、いいかも知れませんですね。」

興味無し。興味無し。

「男女合戦、と直しました。」

「男女合戦、……」

二の句がつげない。馬鹿野郎。ものには程度があるぜ。シラミみたいな奴だ。傍へ寄るな、けがれる。これだから、文学青年は、いやさ。

「売れましてね。」

「え？」

「売れたんですよ、あの原稿が。」

奇蹟（きせき）以上だ。新人の出現か。気味が悪くなって来た。こんな、ヒョットコの鼻つまりみたいな顔をしていても、案外、天才なのかも知れない。慄然（りつぜん）。おどかしやがる。これだから、僕は、文学青年ってものは苦手（にがて）なんだ。とにかくお世辞を言おう。

「題が面白いですものねえ。」

「ええ、時代の好みに合ったというわけなんです。」

ぶん殴るぜ、こんちきしょう。いい加減にし給(たま)え。神をおそれよ。絶交だ。

「きょうね、原稿料をもらってね、それがね、びっくりするほど、たくさんなんです。さっきから、あちこち飲み歩いても、まだ半分以上も残っているんです。」

ケチな飲み方をするからだよ。いやな奴だねえ。金があるからって、威張っていやがる。残金三千円とにらんだが、違うか？　待てよ、こいつ、トイレットで、こっそり残金を調べやがったな。そうでなければ、半

分以上残ってるなんて、確言できる筈はない。やった、やったんだ。よくあるやつさ。トイレットの中か、または横丁の電柱のかげで酔っていながら、残金を一枚二枚と数えて、溜息ついて、思い煩うな空飛ぶ鳥を見よ、なんて力無く呟いてさ、いじらしいものだよ。実は、僕にも覚えがあらあ。

「今夜これから、残金全部使ってしまうつもりなんですがね、つき合ってくれませんか。どこか、あなたのなじみの飲み屋でもこの辺にあったら、案内して下さい。」

失敬、見直した。しかし、金は本当に持っているん

だろうな。割勘（わりかん）などは、愉快でない。念のため、試問しよう。

「あるにはあるんですけど、そこは、ちょっと高いんですよ。案内して、あなたに後で、うらまれちゃぁ、……」

「かまいません。三千円あったら、大丈夫でしょう。これは、あなたにお渡し致しますから、今夜、二人で使ってしまいましょう。」

「いや、それはいけません。よそのひとのお金をあずかると、どうも、責任を感じて僕はうまく酔えません。」

面（つら）のぶざいくなのに似合わず、なかなか話せる男

じゃないか。やはり小説を書くほどの男には、どこか、あっさりしたところがある。イナセだよ。モオツアルトを聞けば、モオツアルト。文学青年と逢えば、文学青年。自然にそうなって来るんだから不思議だ。

「それじゃあ、今夜は、大いに文学でも談じてみますか。僕は、あなたの作品には前から好意を感じていたのですがね、どうも、編輯長（へんしゅうちょう）がねえ、保守的でねえ。」

竹田屋に連れて行こう。あそこに、僕の勘定がまだ千円くらいあった筈だから、ついでに払ってもらいましょう。

「ここですか？」

「ええ、きたないところですがね、僕はこんなところで飲むのが好きなんです。あなたは、どうです。」

「わるくないですね。」

「はあ、趣味が合いました。飲みましょう。乾杯。趣味というものは、むずかしいものでしてね。千の嫌悪から一つの趣味が生れるんです。趣味の無いやつには、だから嫌悪も無いんです。飲みましょう、乾杯。大いに今夜は談じ合おうじゃありませんか。あなたは案外、無口なお方のようですね。沈黙はいけません。あれには負けます。あれは僕らの最大の敵ですね。こんなおしゃべりをするという事は、これは非常な自己犠牲で、

ほとんど人間の、最高の奉仕の一つでしょう。しかも少しも報酬をあてにしていない奉仕でしょう。しかし、また、敵を愛すべし。僕は、僕を活気づける者を愛さずにはおられない。僕らの敵手は、いつも僕らを活気づけてくれますからね。飲みましょう。馬鹿者はね、ふざける事は真面目でないと信じているんです。また、洒落は返答でないと思ってるらしい。そうして、いやに卒直なんて態度を要求する。しかし、卒直なんてものはね、他人にさながら神経のないもののように振舞う事です。他人の神経をみとめない。だからですね、余りに感受性の強い人間は、他人の苦痛がわかるので、

容易に卒直になれない。卒直なんてのは、これは、暴力ですよ。だから僕は、老大家たちが好きになれないんだ。ただ、あいつらの腕力が、こわいだけだ。（狼(おおかみ)が羊を食うのはいけない。あれは不道徳だ。じつに不愉快だ。おれがその羊を食うべきものなのだから。）なんて乱暴な事を平然と言い出しそうな感じの人たちばかりだ。どだい、勘がいいなんて、あてになるものじゃない。智慧(ちえ)を伴わない直覚は、アクシデントに過ぎない。まぐれ当りさ。飲みましょう、乾杯。談じ合いましょう。我らの真の敵は無言だ。どうも、言えば言うほど不安になって来る。誰かが袖(そで)をひいている。

そっと、うしろを振りかえってみたい気持。だめなんだなあ、やっぱり、僕は。最も偉大な人物はね、自分の判断を思い切り信頼し得た人々です、最も馬鹿な奴も、また同じですがね。でも、もう、よしましょうか、悪口は。どうも、われながら、あまり上品でない。もともと、この悪口というものには、大向う相手のケチな根性がふくまれているものですからね。飲みましょう、文学を談じましょう。文学論は、面白いものですね。ああ、新人と逢えば新人、老大家と逢えば老大家、自然に気持がそうなって行くんですから面白いですよ。ところで一つ考えてみましょう。あなたがこれから新

作家として登場して、三百万の読者の気にいるためには、いったい、どうしたらよいか。これは、むずかしい事です。しかし、絶望してはいけません。これはね、いいですか？　特に選ばれた百人以外の読者には気にいらないようにするよりは、ずっと楽な事業です。

ところで、何百万人の気にいる作家は、常にまた自分自身でも気にいっているのだが、少数者にしか気にいられない作家は、たいてい、自分自身でも気にいらないのです。これは、みじめだ。さいわい、あなたの作品は、あなたご自身に気にいっているようですから、やはり、三百万の読者にも気にいって、大流行作家に

なれる見込みがあると思う。絶望しては、いけません。いまはやりの言葉で言えば、あなたには、可能性がある。飲みましょう、乾杯。作家殿、貴殿は一人の読者に千度読まれるのと、十万の読者に一度読まれるのと、いったい、いずれをお望みかな？　とおたずねすると、かの文筆の士なるものは、十万の読者に千度読まれとうござる、と答えてきよろりとしていらっしゃる。おやりなさい、大いにおやりなさい。あなたには見込みがあります。荷風の猿真似だって何だってかまやしませんよ。もともと、このオリジナリテというものは、胃袋の問題でしてね、他人の養分を食べて、それを消

化できるかできないか、原形のままウンコになって出て来たんじゃ、ちょっとまずい。消化しさえすれば、それでもう大丈夫なんだ。昔から、オリジナルな文人なんて、在ったためしは無いんですからね。真にこの名に値いする奴等は世に知られていないばかりでなく、知ろうとしても知り得ない。だから、あなたなんか、安心して可なりですよ。しかし、時たま、我輩こそオリジナルな文人だぞ！　という顔をして徘徊（はいかい）している人間もありますけどね、あれはただ、馬鹿というだけで、おそるるところは無い。ああ、溜息が出るわい。あなたの前途は、実に洋々たるものですね。道は広い。

そうだ、こんどの小説は、広き門、という題にしたらどうです。門という字には、やはり時代の感覚がありそうですから。失礼します、僕は、少し吐きますよ。大丈夫、ええ、もう大丈夫。ここの酒は、あまりよく無いな。ああ、さっぱりした。さっきから、吐きたくて仕様が無かったんです。人を賞讃しながら酒を飲むと、悪酔いしますね。ところで、そのヴァレリイですがね、あ、とうとう言っちゃった、汝(なんじ)の沈黙に我おのずから敗れたり。僕が今夜ここで言った言葉のほとんど全部が、ヴァレリイの文学論なんです、オリジナリテもクソもあったものでない。胃の具合いが悪かった

のでね、消化しきれなくなって、とうとう固形物を吐いちゃった。おのぞみなら、まだまだ言えるんですけどね、それよりは、このヴァレリイの本をあなたにあげたほうが、僕もめんどうでなくていい。さっき古本屋から買って、電車の中で読んだばかりの新智識ですから、まだ記憶に残っているのですけど、あすになったら、僕は忘れてしまうでしょう。ヴァレリイを読めば、ヴァレリイ。モンテーニュを読めば、モンテーニュ。パスカルを読めば、パスカル。自殺の許可は、完全に幸福な人にのみ与えられるってさ。これもヴァレリイ。わるくないでしょう。僕らには、自殺さえ出来ない。

この本は、あげます。おうい、おかみさん、ここの勘定をしてくれ。全部の勘定だぜ。全部の。それでは、さきに失敬。羽毛のようでなく、鳥のように軽くなければいけない、とその本に書いてあるぜ。どうすりゃ、いいんだい。」

無帽蓬髪（ほうはつ）、ジャンパー姿の痩（や）せた青年は、水鳥の如くぱっと飛び立つ。

底本：「太宰治全集９」ちくま文庫、筑摩書房
１９８９（平成元）年５月30日第１刷発行
１９９８（平成10）年６月15日第５刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
１９７５（昭和50）年６月～１９７６（昭和51）年６月発行
入力：柴田卓治
校正：かとうかおり
２０００年１月25日公開
２００４年３月４日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。